



「ぼくらの60~70年代宝箱」

黒沢哲哉著 (いそっぷ社・1600円+税)

装丁 入魂

オレンジ色の背景に懐かしい昭和時代のアイテムが並ぶ。写真と文字がふんだんに使われているが、なぜか邪魔にはならない。15年前に刊行した書籍に32ページを追加した「増補版」だが、装丁は変えなかった。「このデザインが気に入っていたので」と編集担当の首藤知哉さん(63)。「写真の背景に薄い野線のりせんが引か

れているのですが、それを入れることで立体感がでてきますよね。さらに本文と同じキャプションが表紙にも入っています。入れるところをさくするのではないかと少し心配でしたが、出来上がるとぜんぜん気にならないんです」どのページも同じデザインだ。担当したのは日本を代表するブックデザイナー、鈴木成一さん(59)。事務所では1日に1作品のペースで仕事をしているという。

ブックデザイナー

鈴木成一さん

最近では恩田陸さんの『灰の劇場』も担当した。しかし、野線を使ったのはこの1冊だけだ。

「カタログのようですよ。キャプションも入っていますし、野線がないと漠然としてまとまらない。野線があると、整然と見せられ、統一感と緊張感が増す。これやってみようと思いました」

「遠い昔に置き忘れてきた宝物のカケラ」と筆者の黒沢哲哉さん

野線が生む統一感と緊張感

のいう、かつてはやった人気グッズの掲載は2千点に上る。それらを撮影し、写真を切り抜いて、各ページをデザインしていく。手間暇もかかっている。

「人気のあるビジュアル、キャラクターは大きくするか抑揚の付け方はあったと思います。見た目の楽しさでやっていました。おもちゃ箱をひっくり返したような感じですね。この頃は同世代ですら記憶に残っているものは恣意的になったかもしれません」と鈴木成一さん。増補の目玉は17年間の『週刊TVガイド』。その一部をずらりと並べてみた。

今回の増補版に「さしたる理由はない」そうだが、根拠はなくてもいい。15年たつて読者がひと回りし、下の世代も買ってくれることに気づいた。ウルトラマンや仮面ライダーのように『再生産』されるキャラクターは当時を知らない世代でも懐かしさを感じさせる。そんな貴重な一冊であり続ける「宝箱」は、装丁もまた変わることはない。

(蔭山実)